

広がる 救命の輪

応急手当事例集

さまざまな場所で、みなさんの手によって
命をつなげようとする懸命な活動が展開
されています。
その一部をご紹介します。



高校生の勇気ある行動に感謝状

5月21日(火)、東急多摩川線武蔵新田駅のホームで心肺停止状態になった高齢の男性(80代)に遭遇し、駅員等と協力して懸命な応急手当を行った日本体育大学荏原高校の生徒に消防総監感謝状が贈られました。

勇気ある1歩

林さんと西村さんは電車で登校中に「大丈夫ですか?」という声を聞き振り向くと、ホーム上に男性が倒れており119番通報している人がいました。林さんは、同じ車両に乗っていた後輩の横田さんに協力を要請し、3人で勇気を持って救護を行いました。



全校集会で矢口消防署長より感謝状が贈呈されました



感染防止のための
人工呼吸用マスク

人だかりの中で必死の連携プレー

男性は呼びかけに反応がなく呼吸もありませんでした。駅員の方が胸骨圧迫を開始したので、横田さんはすぐさまカバンから人工呼吸用マスク(写真)を取り出し人工呼吸を開始しました。林さんは男性の胸元を開けてAEDのパッドを貼る準備をするとともに、男性の手を握り「大丈夫ですか?聞こえたら手を握ってください」と声をかけ続けました。周囲が騒がしくAEDの音声が聞こえなかったため、西村さんは大声で音声メッセージを復唱しました。たくさんの人が見守る中、駅員の方々と連携して、電気ショックを実施後も心肺蘇生を継続し、救急隊に引き継ぎました。

ペンを持つ手が震えた

その日、学校は定期テストの初日でした。西村さんは「1問解くごとに倒れたおじいちゃんの顔が頭をよぎりました」、林さんは「そのことで頭がいっぱいでペンを持つ手が震えました」と話してくれました。

テスト終了後、教頭先生から男性の意識が戻ったと聞き、2人で安堵の涙を流しました。その日のうちに、駅員の方々にも報告をしに行きました。男性はその後、社会復帰を果たしました。



(左から)横田さん、林さん、西村さん



はやし あいり
林 愛莉さん(高3・ライフセービング部)

「顧問の先生から、『仲間にも情報共有してください』と言われ、その日あったことをグループラインで報告しました。ラインを打っているときも手が震え、言葉足らずなところがあったのですが、先生や部員からは賞賛の声をいただきました。私たち高校生でもできる1次救命処置。1歩を踏み出す勇気を持てば、1人の人生を変えることができるということを多くの方に知っていただきたいと思います」



にしむら あゆり
西村 歩莉さん(高3・上級救命講習受講)

「心配して見ている人や声をかけてくれる人がたくさんいました。私はAEDの目の前にいたので、音声メッセージを聴き取って林さんたちに伝えました。高1のときの救命講習がなかったら、どうすればいいかわからずパニックになっていたと思います。ボランティア活動をしています。同じようなことが起きたときには、今回の経験を活かして助けられるようにしたいです」



よこた こうたろう
横田 虹太郎さん(高2・ライフセービング部)

「人工呼吸用マスクはいつもカバンなどにつけていますが、実際に使ったのは今回が初めてでした。ライフセービング部の練習ではマネキンを使っていますが、実際倒れている人は汗ばんでいて、手がすべってしまいなかなか気道確保が取りにくく、練習とは違った難しさがありました。今回のことで、後輩たちに自信を持って技術を伝えることができるようになりました」

同校では、矢口消防署と協力して定期的に救命講習を開催しており、応急手当奨励事業所の認定を受けています。今回の3人の活躍は、先生方をはじめ、生徒の皆さんの誇りと励みになったことでしょう。

取材協力:矢口消防署

マンションの AED で救命

8月6日(火)、江東区豊洲のマンションに住む男性(50代)が自宅で心肺停止になりました。

同マンション防災センター員のおおふか しゅうすけ(35歳)は、建物巡回中に、倒れた男性の息子さんに遭遇しました。「父親が発作を起こしたようです! AEDを搬送してください!」と慌てた様子が頼まれたため、エレベーター設置のAEDを搬送し、男性の部屋へ駆けつけました。

男性は呼びかけに反応がなく呼吸もありませんでした。大深さんは心臓マッサージ(胸骨圧迫)とAEDによる電気ショックを2回実施し、救急隊が到着するまで、心臓マッサージを継続しました。早期対応が功を奏し、男性は一命をとりとめました。

8月23日(金)、迅速で的確な応急手当を行った大深さんに対し、消防総監感謝状が贈呈されました。大深さんは、「一目で重症だと思いました。必死でしたが、体が自然に動きました」と語りました。大深さんは上級救命講習を受講しており、年に2回の応急救護訓練にも参加されています。

(深川消防署)



当時の心境を語る大深さん(右)と大深さんの上司